

## コスモス入会のこと

## そろそろ恩返し

浅野 千里

短歌を学べる珍しさもあり、勉強会は楽しく、居心地が良かった。

そのうち自分の作品と名前が本誌に載り、憧れの方々の作品などが読める楽しみもできた。しかし十首投稿しても三首しか載らず、くすぶっている先輩方は「コスモス」は選が厳しいから上達するのよ、と励まして下さった。そのうちの何人かは鬼籍に入られたが、先輩方に育てていただいた、という思いは強く、心から感謝している。残念ながら未だに私が一番年下だが、そろそろ先輩方に恩返しができると思っている。

## 口の中で呟いて作ること

鮎沢 永二

入会後は観音寺勉強会にも参加した。当時、横山氏と故織田敏夫氏ご指導のもと、会には十数名が参加し、活気があった。もうオバちゃんを自覚していた私を若くていいなあと皆さんはおだて、かばい、優しくして下さい。実際一番若く、

私は昭和三十八年の四月、松本市内の鶴林堂という書店から雑誌、「短歌研究」を購入しその広告欄からコスモス短歌会に魅力を感じ入会させてもらった。その当時の内容は出詠者が七百五十名、目次には、北原白秋の作品と共に佐藤達夫の植物誌、同人の連載評論、ことは論議などがあり新鮮な魅力を感じた。

扱って、コスモス長野支部の創立は本部のコスモスと同年昭和二十八年で、十一月二十二日・二十三日の二日間にわたり信州戸倉温泉に、宮柁二、野村清、片岡恒信、鈴木英夫、今村寛、中山礼治、千曲井村、白川隆志、中山博ほか二名の十一人が参集、長野支部が発足した。

以来、七十年が経つ。私は三鷹市に兄がいて訪ねた折に、宮先生のお宅へ伺わせていただいたことがある。

丁度、宮夫人もおいでになつてお茶をいただきお話し下さった。美味しい漬物をいただいていると宮先生が「歌を作るにはね、今、鮎沢さんが噛まれていると同じように、口の中でよく呟いて作る事が大事でしょうね」とおっしゃった。つまり、「舌頭千転」のお話を頂いたことが今も脳裏より離れないでいる。

## 北九州でスタート

江頭 洋子

学生時代の友人の手紙の末尾にいつも短歌一首が添えてあり、私も作りたいと思いつながらでせずに数年が経った。

昭和五十三年夫の転勤で北九州市小倉北区に転居。ある日近くの朝日文化センターに短歌教室があると知り覗いてみた。その時の講師が平松茂男氏で、まもなく突然に「コスモス」で勉強するように勧められて何もわからないまま入会したのが五十四年九月、四十五歳であった。コスモスという結社も宮先生のお名前も知らない全くの短歌無知の私の歌の「おやちとふ言葉をはじめて口にせし十三歳の息子を見凝む」（野村清選）など三首が十二月号にはじめて載った時の感激を忘れない。

昭和五十五年十月十日門司の和布刈に宮先生の歌碑が建立され誘われて出席した折に車椅子の先生の後姿をお見かけした。このほんの二、三分を大切に胸に仕

舞っている。

翌年十度目の転勤で長崎に戻り長崎支部に入った。池田敏起、一瀬理、本多道子、宮田秀子、椿山登美子さん達に色々教わったが現在は椿山さん以外は他界された。そして四十三年が過ぎた。

## 隣席の人

小田部雅子

どこに入ろうか、数冊の結社誌を取り寄せた。勤務中にこっそり「コスモス」を眺めていると、隣席から声。

「コスモスに入ってるんですか？」

「いえ、そういうわけでは……」

私はあわてて片付ける。

「いやいや、いいんですよ。私……、いま入り直すならコスモスですね」

その人はうれしそうに話します。長く結社日についてそれなりの立場であることでも宮柁二が好きなこと。コスモス若手の高野公彦も魅力的なこと。

私はすぐコスモス入会を決めた。『山西省』に感動していたから当然なのだが、

だれかの一押しが欲しかったのだ。

またあるときその人は、

「先月は二首だったが、今月の四首よりもあちらのほうがよかった」と、数よりも質と教えてくれた。

その人は転勤してしまっただが、できたばかりの茨城支部が身近な勉強の場となった。コスモスに毎月十首送ることに慣れた頃、三十周年記念大会が京王プラザであった。白のお髭の宮先生や長袖腕まくりの高野氏に、遠くから初めてお会いした日だった。

## 読書会という飲み会

影山 一男

一九七〇（昭45）年九月にコスモスに入会した私は、翌年四月国学院大学に進学した。だが学園紛争の影響が色濃く残り、大学は荒廃していた。短歌研究会に入り、毎日部室で屯し麻雀、パチンコ、競馬と遊び呆けていた。将来の事など何も考えていない阿呆学生だった。

そんな中で月一回駿河台下の喫茶店

（しゃとう）で開かれていた奥村晃作、高野公彦さん達の読書会に行くのが楽しみだった。その頃はドフトエフスキー全集を読んでいた。七、八人の出席者がいた。亡くなった関口由紀子さんもその一人だった。読書会が終ると水道橋まで歩いて（後楽）という居酒屋に行った。モツ焼をつまみにお銚子を何十本も並べた。関口さんは手作りのぬか漬けを持ってきた。せっかく読んだドストエフスキーはどこかに消えてしまった。奥村さん三十代半ば、高野さん二十代終りと飲みざかりだった。当然の事ながら短歌の話などはせず、愚にもつかない事を延々としゃべり飲んでた。なぜあんなに飲んでたのだらうと不思議に思う。でも仕方ない。皆、宮柁二の弟子なのだから。

## 三人の夜

狩野 一男

高野公彦氏の第一歌集『汽水の光』の奥付によると発行は、一九七六年三月二十五日だが、実際、二月には本屋に並ん

でいたと記憶する。丁度その頃、ぼくはコスモスの事務室に通い始めた。

三月初旬の、或る平日の午後四時前の宮柁二先生宅。高野氏が水色の風呂敷包みを抱えて見えられた。直ぐには理解できなかつたのだが、それは宮先生、宮英子さんにさしあげる歌集の包みであった。当日、ご挨拶に伺う約束だったとのこと。五時過ぎ、事務室のわれわれも応接間を呼んでいただいた。先生は大層よろこばれて、実に楽しそうだった。スコッチを飲みながら歓談のさなか、突然おっしゃった。「吉祥寺に行かんかね」。ぼくも誘われ感激、三人で出かけた。

地下一階にある（呉峰（ごほう））というピアノが置いてある高級なバーで、先生の行き付けの店のようだった。「あのゴッホを漢字表記すると、呉峰になるんだね」。先生に教えていただいた。

グラスを傾けながら、先生と高野氏は静かにお話をされていた。やや離れた席でぼくは黙って飲んでた。宮柁二先生と高野公彦氏と不肖狩野の、最初で而して最後となった、三人の夜、だった。

## 若い日

河北 笑子

コスモス入会は一九六七年。当時の神奈川支部は葛原繁支部長の許に、男性は伊藤麟、金子一秋、加藤盛美、山口末吉、関口福衛、武田弘之、女性は鵜飼幾子、蓮本ひろ子、早島和子、林素子ら錚々たるメンバー。月一回開かれる歌会は桜木町の日新運輸ビル（葛原さんの勤務先）の地下会議室だった。当時、私の娘は三歳、私の後を追って泣く。その娘を歌会が終るまで、夫が野毛山動物園で遊ばせる。コロナ禍で三年前から神奈川歌会が開かれなくなるまで歌会を休んだことはない。そして今日までコスモス本誌への投稿も無欠詠だけが取り柄の、上達しない歌を詠み続ける日々である。

しかしコスモス創刊七十周年の今年、私は八十九歳。コスモス入会以来五十五年、半世紀以上を生きてきたが体力も智力も衰えがちな昨今である。現在、幸いにして若い会員が増え、世代交替は着実

に進んでいる。私も老体に鞭打ち、固くなった頭をほぐしながら若い人達の新しい歌を理解し、刺激を受けてその歌を享受したい。私自身入会当時のわくわくする思いで歌を詠み続けた。

## 覚悟の源に

桑原 正紀

頂き、大会で表彰があるというので、翌年の越後湯沢での全国大会に初めて出席した。壇上で宮先生が私に表彰状を渡した後、おもむろに傍らを飾るコスモスの花の一輪を摘み取り、私の胸ポケットに挿して、ぼそりと「君には期待しているよ」と仰った。私は先生の目をしっかりと見返し、「はいっ」と応えた。たったそれだけのやりとりが現在の私を支えて、コスモスのために尽くす覚悟の源となっている。

## 初めての歌会

佐藤 慶子

作品が初めて「コスモス」に掲載されたのは一九六一年七月号。大学三年の時である。当時、雑誌の「短歌」を読んでいた私に父が「歌を作るなら、宮柁二氏のコスモスに入ると良い」と勧めくれた。父は学生時代の一時期、白秋の「多磨」に所属していたのである。入会した私は初めて歌会というものに出席。たしか松本楼での記念歌会だったと思うが、その歌会の詠草に「河骨」を詠んだ作品があった。が、私は読みも意味も分からなかった。私はその日、辞書を持たずに参加していたのである。そんな折、受付の若い女性が声を掛けて下さった。その方が当時は滝口姓を使っておられた英子夫人であった。

## コスモス大好き、大切

新保弥代枝

その後、英子様が女高師出身の先輩と分かり、そんなご縁から宮柁二先生が担当されていた「朝日歌壇」の投稿歌のハガキの整理のお手伝いを依頼された。しかし茅ヶ崎からの通学で私には時間的な余裕がなくお断りをしてしまった。そんな私に二年後、宮先生は第十回のO先生賞を下さったのである。コスモス在籍六十余年、私はもうすぐ八十二歳になる。

私がコスモスに入会したのは昭和四十八（一九七三）年、二十五歳の時であった。それまで短歌とはほとんど縁の無い大学院生で、古代歌謡文学を専攻していた。或るとき奇縁としか言いようのない縁があつて、高野公彦さん達がやって来たG・ケイオスという歌人グループに顔を出すようになった。そして、高野さんからさりげなくプレゼントされた宮柁二の抄出歌集『小現実』が、私も作歌を試みようとする大きな決定打となった。それほどまでに宮柁二の作品世界は魅力に満ち、表現手段としての可能性を私に示唆してくれたのだった。

入会后三年ほど経ったころ桐の花賞を

決めると、札幌支部の後藤さんを紹介され、初めて歌会という場へ出席することになった。不安いっぱいであったが、和やかな雰囲気の中で厳しく率直な意見が交わされているのが快く、この会で勉強したいと強く思った。

毎月十首の出詠は大変で、常に四苦八苦。歌会では何を言つてよいか分からず的外れの発言。それでもコスモス誌からは多くの方の心情が正直に伝わってくるようで親しみが増していった。選者や編集の方々の評言や苦言は温かさに裏打ちされているのが感じられる。更に誌面には会員の「コスモスが大好きで大切だ」との思いが溢れている。こんな思い込みかも知れないものに励まされて十六年が過ぎた。それが思い込みではなく事実だったことに感謝している。

札幌支部は高齢の方が多く、人生の殆どをコスモスと共に歩んでこられたようだ。辛い時期を短歌を支えに乗り越えた方も多い。それを知るにつけ、生き方を示して頂いているような気がする。

## 若さの勢いのまま

鈴木千登世

コスモスに入ったのは平成四年の、娘が生まれた直後だった。その数年前に『サラダ記念日』が火付け役となって短歌ブームが起こり短歌を身近なものに感じていた。生まれたばかりの娘との濃い時間の中で、社会から置いて行かれるような不安とやつと地に繋がったような不思議な安堵を覚えていた。

短歌の総合誌でコスモスを知り、当時の教科書にあった「相揉める車中に誰か差し上げし大輪の菊芽えつつ青む」という宮先生の歌に感じた誠実さ、生活の実感の上に立った清潔さやまなざしの温かさに惹かれ、若さの勢いのまま編集室に電話して入会を申し込んだ。

自分の歌が誌面に載った感動に後押しされ支部歌会にも参加した。当時の歌会の緊張感や会の後の和やかな雰囲気と共に忘れたいのが、どういう経緯だったのか、山下清司先生のコスモス賞受賞の

お祝いの席に赤ん坊だった娘と出席したことだ。今思うと冷や汗が出る。

支部の皆さんに最年少の会員として大切にされ、山下先生からは今も作歌の支えとなっている言葉をいただいた。多くの好意に包まれた幸福な出発だった。

## 短歌は自己への問いかけ

摩尼 久晴

私は長い間「新潟日報・歌壇」の宮先生の選に投稿を続けていた。先生は「短歌は自己への問いかけ」「短歌は態度の文学」と、歌壇に寄せて、に書かれておられた。

当時、私は村上の高校に勤務しており、講師でおいでの高田先生から「いつまでも投稿歌人であつてはならない」と忠言をいただいた。またK氏からの誘いもあり、昭和四十一年に「コスモス短歌会」に入会した。

入会をした当時、選者が八名で八百余名の会員を分担して選を行っていた。その選をさらに宮先生が見て発表すること

になっていた。選者はどこを選をしたか発表は載らなかったのである。

私の「その二集」は、他集と違って七つの圏に分かれていた。新潟県は中部圏で、岡崎康行氏、川路冬樹氏、山本清氏と言った方々の名前があった。私はまったく知らない人達であった。その後、勉強会に入り、中山礼治先生の指導を受ける機会を持つことができた。駒田氏を除き、ほとんどの方々は亡くなり、淋しい限りである今日だ。もう少し頑張りたいものだと思っている。米寿を生きる。

## 厚木市棚沢に住んで

宮里 信輝

仕事の関係で神戸から神奈川の大和市に移り、結婚して新しい生活に入ったのが昭和五十一年である。

大和に住んでいた家の近くに泉の湧いている森があった。その森は「泉の森」と呼ばれ、水源地として保存されている広い雑木林で、中には泉をめぐって散策道があり、私はランニングをしたり、新

しく生まれた命を抱いて、よく歩いたりした。毎日の生活に、泉からかすかな光が差すようで、私の命はうるおされ、作品創造においても多くの恩恵を受けた。やがて国道246号のバイパス線が森を通る工事が始まり、池は埋め立てられ、灰色の脚柱が立ち、美しい糸蜻蛉や、その池に棲んでいた小さな生き物達は壊滅した。小さな出来事なのだが、そのことが人間のひとりである私の心に、かすかな痛みと痕跡を残す。歌集『青世界』で詠んだ糸蜻蛉の「世界は、邁進する人間の営みの陰に、もうこの世から絶えたことも記しておきたい。

仕事の関係で更に厚木市の「棚沢」に移った。ここは厚木市の米作地帯で、緑の苗のときから黄金の稲穂、刈り入れなどを目の当たりにしている。

## コスモスで学んだこと

義原 一郎

入会して十年目になる。私が今まで学んだことを振り返ってみる。

一、どのように詠むか。

宮修二先生が、繰り返し述べておられる「見るものを見るがままに」、「余計な修飾語や感情表現はできるだけ削る」という趣旨の言葉は、初心者には分かりやすかったが、行うのは難しかった。

短歌という型式は韻律を守るだけで美しくなるのだということを理解した。

二、どのような歌を詠むか。

「自らの生の証明を」という言葉を、私は初め、先の方法論とも相まって、自然主義文学的な「現実直視」という意味で捉えていた。

ところがやがて、桑原正紀著『宮英子の歌』を読んだりして、宮英子先生のロマンティズムやモダニズムの匂い立つ華麗な歌にふれて衝撃を受けた。

そして、ひとが「思い」を作品化して残そうとする行為は、すべて「自らの生の証明」となるのだと思に至った。

また、「真と新」の「新」とはオリジナリティのことではないかと考えながら、この頃の私は、自らの「思い」を追究している。